

# 『おくのほそ道』の出発

竹 下 数 馬

## (一)

元禄二年（一六八九）、芭蕉は数え年四十六歳になった。

貞享元年（一六八四）の「野ざらし紀行」の旅と、貞享四年（一六八七）から翌元禄元年にかけての「おい笈のこぶみ小文」の旅と、今までに二つの大きな旅をしているが、今年こそそれらの旅の仕上げをしたいと思った。

「野ざらし紀行」と「笈の小文」の旅では、何れも江戸から西下して郷里の伊賀上野（三重県上野市）に向い、伊勢や吉野その他を訪れている。しかし、今度は方角が違う。今まで一度も行ったことのない東北・北陸の旅である。未知の土地である。それだけに一つの冒険であるとも言える。

しかし、いかなる危険をおかそうとも今年は是非このことを実行しなければならぬと決心したのである。

元禄二年という年は芭蕉にとって重大な意味をもつ年である。それは、芭蕉のいのちの親とも仰ぐ西行の没後五百年目に当る年だからである。すなわち、西行五百年忌の年なのである。

西行は建久元年（一一九〇）二月十六日、七十三歳で亡くなっている。「願はくは花の下にて春死なむそのきざらぎの望月のころ」という歌を残し、その願いの通りに河内国（大阪府）の弘川寺ひろかわでらで示寂したのである。

芭蕉は熱烈な西行崇拜者である。西行信者、西行狂、西行気遣いと言ってもよい。

寛文十二年（一六七三）、二十九歳の時、郷里をあとにして江戸に下った芭蕉は、しばらく江戸市中の上水道工事に関係していたと言われる。のちに門人許六きよろくが「武（武蔵江戸）の小石川の水道を修め、四年にして成る。速かに功を捨て、深川の芭蕉庵に入って出家す」（『風俗文選』原漢文）と述べているように水道事業に関係していたことは事実であろうが、間もなく何故にこのように若くして出家したのであるうか。出家は僧になったという意味ではなく剃髪して僧形になったということであろうか。

ところで、彼が師と仰ぐ西行も保延六年（一一四〇）十月、年二十三の若さで出家遁世の一大事業に踏みきっている。出家後の西行は各地を修行して歩き高野入山、大峰修行等の苦行をして奥州へは二度も旅をしている。彼の旅が単なる物見遊山のそれではなく聖ひじりとしての宗教的な行であったことが注目される。

このように見て来ると、芭蕉の出家も西行にならったものと考えるのがよいであろう。家を捨て、衣食を捨て、肉身を捨て、名を捨てて一所不住の遊行ゆぎやう廻国の生活を送る聖ひじりのことを捨聖すてひじりという。西行の後輩で中世の遊行僧、一遍は時宗の開祖とされるが『一遍聖絵』には「たうときすてひじりのをはしつるが、念仏往生の様、出離生死の趣とかれつるを聴聞するに」とある。一遍のことをよく捨聖すてひじりというが、西行もまた捨聖であったといつてよい。そうして芭蕉もまた。

芭蕉の心の中には明かに西行があった。その先輩の能因があり、また遊行の一遍もあった。遊行の思想に生きる連歌師たち、なかんずく宗祇があった。

この心の系譜をさかのほれば、さらに役の行者があり、行基があり、空海があった。行尊があり、花山院があった。

これらの人達の名は『おくのほそ道』のあちこちに見えかくれする。

『おくのほそ道』の旅は、捨聖を心に期する芭蕉の遊行廻国のそれであり、西行ゆかりの地を訪ねて五百年忌供養をするための旅であった。そして、ゆかりの聖地・霊山を巡礼しつつ故人の霊を呼び起し、その霊と交流する一種の冥界めぐりの旅でもあった。

このほか、元禄二年の旅にはもう一つ重大な意味が考えられる。それは、この年が伊勢神宮の式年遷宮の儀式が行われる年であったことである。『おくのほそ道』の最後は「長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんと、また舟に乗りて、蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」という文章で結ばれている。この度の旅は、あるいはこの「伊勢の遷宮拜まんと」するのが究極の目的ではなかったか。

伊勢神宮の遷宮行列では、神霊（神儀・鏡）が仮御樋代である舟形木棺に納められ、行障と絹垣の中にはいり、道敷布の上を進み、明衣という純白の絹で作った神事服を着けた神官らに守られながら新宮へと渡御される。その際の前陣後陣の行列は葬列を意味する。つまり古い神の死である。しかし死は単なる死ではない。神儀が新宮に入御されると大宮司・少宮司が御扉を閉じる。かくして遷御の儀は終る。

翌日になると祭主以下が瑞垣御門の前で、大御饌供進の儀を行ない、さらに勅使が新宮で奉幣の儀を執り行う。これは神の新生、誕生を意味するものと思われる。

このようにして、神は一旦死んで再び生きかえるのである。やがて、新しい生の誕生を迎える。死と再生の儀礼がとり行われ、かくして神はこの優礼をくり返すことによって永遠の生を保ちつづけるのである。人はこれを擬死再生

の優礼という。

芭蕉は『おくのほそ道』の旅で西行はじめ多くの今は今ひじりき聖たちの霊を呼び起し、その霊を身に帯びて擬死再生をはかったのではなかったか。そして、最後の仕上げが伊勢神宮の遷宮の儀式、つまり神の死と再生の儀礼を拜むことにかかっていたのではなかったか。

## (二)

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅をすみか栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲へんうんの風に誘はれて、漂泊の思ひやまず……」

有名な『おくのほそ道』の書き出しの文章である。

「月日は百代の過客」という時の「月日」を従来は単に時間（光陰）の意味に解釈して来た。「月日のたつのは早い」というような言い方と同じように考えるのである。しかし、この場合は「月日」という一つの単語としてとらえるのではなく「月」と「日」というように二語に分けて考える方がよい。すなわち、「月」は太陰であり、「日」は太陽である。月の運行、日の運行としてとらえ、百代（永遠）にわたって去っては来、来ては去って行く、循環をくりかえす旅人だと観じたのである。「月日」を抽象的に時間の意味に解釈するのは適切ではない。宇宙の旅人としての「太陽」と「月」としてとらえるのでなければならぬ。

『おくのほそ道』の書き出しの文章は唐の詩人・李白の「春夜宴諸從弟桃李園序」という文にある「夫、天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世若夢、為歡幾何」によると言われている。しかし、『おくのほそ道』はその

単なる模倣や引用ではない。「月日は百代の過客」というのは芭蕉の新造語であるといってもよい。

太陽や月は、古代人によって「死と再生」の想念でとらえられて来た。日没は、太陽が暗い洞窟（太陽の洞窟）にこもること、闇の世界（冥界）にこもること、つまり太陽の死であり、日の出は新たな生命を享けての再生である。再生・新生のためには死（擬死）が必要とされる。この死と再生をくりかえすことによって、百代（永遠）の生命が保証される。かくして百代の過客となり得るのである。

月についても同じことが考えられる。闇夜をもたらす自然現象を「月隠つづも」と言い、月の終りを指すが、それは月が暗い洞窟（月の洞窟）にこもること、つまり月の死を意味する。反対に、月のはじめが「朔日ついたち」と言われるのは「月立たち」、つまり新らしい月の出發、月の再生を意味している。

そうして、日ごとに太陽の、月ごとに月の「死」と「再生」がくり返されて大晦日おおみそか（大月隠おほつごもり）になり、そこで年は古い生命を葬り、新たに生れ変わって新年となる。

かくして「行きかふ年もまた旅人なり」ということになる。「行きかふ」「行き交かふ」というのはただ単に流れのよりに過ぎ行くというだけの意味ではない。「行き交かふ」とは、行ったり来たりするという意味である。それでは「年」は行ったり来たりするものなのであるか。

東洋には還暦という考え方がある。六十年で再び生れた年の干支に還る、と考えるのである。六十年の長い旅を続け再び元のところにもどるのである。グランドを一周して出発点にもどるようなものである。グランドをくりかえし何周もする長距離競走がある。長距離競走は五周か十周かで終るのであるが、「年」は長距離競走（循環）を永遠にくりかえしながら前進するのである。「行き交かふ年」というのはこの永遠の循環をいうのである。年（時間）は単に直線的に過ぎ去って行ってしまうのではない。循環しながら前へ進む。すなわち螺旋状にぐるぐるまわりながら進んで

行くのである。その間、死と再生をくり返しながら永遠の運行をつづける。

時間というものをこのような永遠の循環運動・螺旋運動としてとらえるのが古代人の考え方である。螺旋運動と言えば銀河系の星雲がこの運動をしていることはよく知られている。また、最近の分子生物学では生命活動のもとをなす遺伝子の実体がDNA（デオキシ・リボ核酸）であり、それが二重螺旋構造をもつことが分かって来た。螺旋というものは大宇宙や生命に密着した神秘的な形態なのではなからうか。

『おくのほそ道』冒頭の文章はこのように重要な意味を持っている。決して美辞麗句をならべた空疎なものではない。このように美事な宇宙観・世界観をはっきりと打ち出した文学者が他にあるだろうか。

太陽や月のような天体の運行と同様に人間もまた循環をくりかえす旅人である、と芭蕉は考えた。「舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす」と述べたのはそのような意味であろう。そのことを自覚するかどうか、は人によって違うけれども。

「古人も多く旅に死せるあり」というのは、そのことを自覚して旅に生き、旅に死んだ先人のことを回想して述べた文章である。のちに出てくる『おくのほそ道』の桑折こおりのところ、「羈旅きりよ辺土あんぎやの行脚、捨身無常の観念、道路に死なん、これ天の命なり」と述べているが、身を捨て辺土の道路に死ぬことを期しての旅が遊行ゆぎやうの旅であり「野ざらし」の旅でもあるわけである。

芭蕉が「古人も多く旅に死せるあり」と述べた時、彼の脳裡にあったのは、さきにも触れた捨聖すてひじりの系譜であったと思われる。役の行者であり、行基であり、空海であり、能因であり、西行であり、一遍であった。この「古人」の中に中国の詩人、李白・杜甫を入れる説が一般に行われているが、それは当たらない。「予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず」と、漂泊の思いにかられて旅した人々の系譜の中に「予も」といって自分を加

えてみたかったのである。その志も昨日や今日にわかに起ったものではなかった。「予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」である。

そうして「春立る霞の空に白川の関こえん」と思い「松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り杉風が別墅に移る」ことになる。

関所を越えることは人生の通過儀礼にも擬せられる。人の一生を旅と考えるならば、人々は何回か関所を越えなければならぬ。その都度、脱皮変身のための通過儀礼を行なうのである。

(三)

「住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸置。」

『おくのほそ道』冒頭の部の終りの文章である。今まで住んでいた芭蕉庵を人に譲って門人・杉山杉風の別荘に移ったというのである。捨聖に家は必要がない。無庵無住、一所不住でよいのである。家を出る、文字通り出家するのである。杉風の別荘に移ったのは出發前の方違えのためであろう。その日がいづであったのかは分らない。『おくのほそ道』にも曾良の『随行日記』にも出ていない。

『随行日記』の最初のところには

「巳三月廿日 日出、深川出船。巳ノ下尅千住ニ揚ル。」

とあり、『おくのほそ道』には

「弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として……」

とあって、三月二十七日に千住を出発したことが記されている。

しかし、これらは深川や千住出発の日時の記事であって、芭蕉庵を人に譲ってそこを出た日時については何も記録はない。

三月の上旬から中旬にかけてであろうとは想像されるけれども、はっきりしたことは分らない。

志田義秀は、芭蕉が伊賀への書簡「節句過には拙者は発足仕候間」を引いて「二月末乃至三月初めの交」としている。（志田義秀『奥の細道・芭蕉・蕪村』）

松本義一は『芭蕉桃青翁御正伝記』の「三月七日、深川なる蝸牛の栖を出て奥羽の行脚に首途し給」とある三月七日を移転の日を指すとしている。（連歌俳諧研究第七・八合併号）

もしも、三月七日移転説が正しいとするならば、それは三月の節句を過ぎたあとということになる。

草の戸も住替る代ぞひなの家

という『おくのほそ道』のはじめの句に出て来る「ひなの家」の「ひな」を従来、多くの学者は雛祭り、雛人形の「雛」の意味に解して来たが、その根拠はまったくなくなるわけである。なぜならば、三月三日までは雛人形を飾るけれども、四日にはとり片づけてしまうからである。四日すぎまで飾っておくと娘が縁遠くなるという嫌われる風習がある。

七日に移転したとすれば、雛人形はまったく見られない筈である。

「草の戸も」の句についてはいろいろの説があるけれども一般的には、「このこうにみすぼらしい草庵も、やがては次の人が移り住んで、折から雛祭りの頃とて、自分の居た時とは違って、華やかな雛人形なども飾られる家となるこ



とであろう」というような解釈が行なわれている。

このような通説・俗説が間違いであることは言うまでもない。

なぜこのような間違いが起ったかと言えば「ひなの家」の「ひな」の意味が正しく理解されなかったからである。

芭蕉は、芭蕉庵にこもっていたこれまでの自分を、巢ごもりをしていた「ひな」に見立てて言ったのである。「草の戸」芭蕉庵は、「ひな」にも擬せられる自分自身がこもっていた巢だといっているのである。巢ごもりを終えた「ひな」が成鳥に脱皮変身して、今まさに巢を飛び立とうとしているのである。「巢ごもり」から「巢立ち」へ、である。

芭蕉が「巢」を飛び立ったあと、芭蕉庵を譲られた人が新たに「巢ごもり」にはいるのである。これが「住替る代ぞ」の意味で、この句は生命の交替、「死と再生」の考えを配して詠まれたものだと思すべきであろう。

住居「草の戸」というものは、もともと擬似母胎であり、いつかは脱け出さねばならない仮の宿である、という考え方が日本人にはある。そこから脱け出すことによって、ひとつの成長を遂げるといふ考え方もある。

芭蕉が『おくのほそ道』の出発にあたって最初にこの句を詠んだ意義は大きい。

ところで、芭蕉はこの「草の戸も」の句を発句とする初表八句を柱にかけ置いたと述べている。芭蕉はなぜこのような行動をとったのであろうか。

連句の草稿は、懐紙をとじたままで柱にかけて置くのが常式であった、という説がある。名残を惜しむ気持ちからである、とか、記念としての意味があった、とかいう説もある。

ところで、わが国では死を覚悟して死地におもむく際、辞世の歌や句を柱や壁などに書きそけて出発するならわしがあった。

有名な楠正行の物語は人のよく知るところである。『太平記』巻二十六、「正行参<sup>ル</sup>吉野<sup>ニ</sup>事」の条には

「正行・正時・和田新発意・舎弟新兵衛・同紀六左衛門子息二人・野田四郎子息一人・楠将監・西河子息・関地良圓以下今度ノ軍ニ一足モ不<sup>レ</sup>引<sup>カ</sup>、一処ニテ討死セント約束シタリケル兵百四十三人、先皇ノ御廟ニ参テ、今度ノ軍難義ナラバ、討死仕ルベキ暇ヲ申テ、如意輪堂ノ壁板ニ各名字ヲ過去帳ニ書連テ、其ノ奥ニ、

返ラジト兼テ思ヘバ梓弓ナキ数ニイル 名ヲゾトゞムル

ト一首ノ哥ヲ書留メ、逆修ノ為ト覚敷テ、各鬢髮ヲ切テ仏殿ニ投入レ、其ノ日吉野ヲ打出テ、敵陣ヘトゾ向ヒケル。」

とある。

屋島の合戦に敗れ、高野山から熊野那智に死地を求めて補陀落渡海した平維盛の物語も涙をそそる。

「三の山の参詣事ゆへなくとげ給ひしかば、浜の宮と申す王子の御まへより、一葉の舟に棹さして、万里の蒼海にうかび給ふ。はるかのおきに山なりの嶋といふ所あり。それに舟をこぎよせさせ、岸にあがり、大きな松の木をけづつて、中将銘跡をかきつけらる。

「祖父太政大臣平朝臣清盛公、法名浄海、親父内大臣左大臣重盛公、法名浄蓮、三位中将維盛、法名浄圓、生年廿七歳、寿永三年三月廿八日、那智の奥にて入水す。」

とかきつけて、又奥へぞこぎいで給ふ。」

(『平家物語』巻第十、維盛入水)

また、芭蕉が神のごとくに崇拜した西行の『山家集』には次のような文が見られる。

「陸奥国<sup>みちのくに</sup>へ修行してまかりけるに、白川の関に泊りて、所がらにや常よりも月おもしろく哀にて、能因が秋風ぞ吹くと申しけんをりいつなりけんとおもひ出られて、名残おほく覚えければ、関屋の柱に書<sup>かきつけ</sup>付ける。」

白河の関屋を月のもる影は人のこころをとむるなりけり」

関所を越えることは一種の死を意味する。今までの古い殻をぬぎ捨てて（擬死）新らしく生れ変わって出発する（再生）ということになる。「死と再生」「擬死再生」である。

正行も維盛も西行も死（擬死）に臨んで辞世の歌文を草したのである。（もともと、西行は死の前年、願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ、という有名な辞世の歌を詠んでいるが）

芭蕉が、芭蕉庵を出るにあたって「草の戸も」をはじめとする初表しよおもて八句を柱にかけ置くかけ置くと書いたのは死（擬死）を覚悟して死地におもむく決意を表明したものではなからうか。それと同時に、芭蕉の脳裡には、西行が白河の関を越える時に関屋の柱に書きつけた歌のことがあったのではなからうか。

ここでまた思い出されるのは室町時代の遊行僧・道興准后の『廻国雜記』のことである。この紀行文は道興が文明十八年（一四八六）六月上旬、京を出て北陸・関東・東北の修験の行場を巡遊する「北征東行」の旅の記である。

道興は出発にあたって

千さとまで思ひへだつなふじのねの煙のすゑに立ち別るとも

旅衣たつよりしぼむむさし野の露やなみだのはじめなるらん

という別れの歌を東山殿（義政）にたてまつるのである。

多くの知人たちが「馬のはなむけ」をして別れを惜しむ。これに対して彼は

君がため千世もと祈るしるしあらばさらぬ別れを神も憐れめ

と詠む。「さらぬ別れ」とは死別を意味する言葉であるが伊勢物語に出ていて人々になじみが深い。道興がこの度の旅を死出（擬死）の旅であると考えたことに注目しなければならぬ。

道興はいよいよ草庵を出ることになる。「年月馴れし柴の庵、暫しばかりの名残さへ、立別るゝは心細きを、あだし世の習ひといひ、身既に老後の事なれば、立帰り住居すべしともたのまれず、池の辺ほとりにたゞずみて

住みなれしこの山水のあはれわが誘はれ出づる行方しらずも

大原まで皆々うち送りに来待る中に、乗々院法印（常親）神明の拝殿にて破子など携へ侍りて、数刻興を催し侍りき。」

『おくのほそ道』の出発のところとよく似た文章である。

芭蕉はこの『廻国雑記』を念頭において『おくのほそ道』を書いたのではなからうか。

「草の戸も」の句を柱にかけ置いた芭蕉は二百年前の道興と同じように出発にあたってそれが死出の旅に出かけることを意味することを表明する必要があった。

すなわち、芭蕉は死者となって（擬死）冥界へおもむくことを表明したのである。百五十日、六百里におよぶ『おくのほそ道』の旅は冥界めぐりの旅であり、胎内くぐりの旅でもあると言えようか。

「弥生も末の七日」つまり三月二十七日（元禄二年）芭蕉は「千じゆと云所いよにて船をあが」って『おくのほそ道』への第一歩を踏み出すのである。その時「人々は途中に立たちならびて、後うしろかげのみゆる迄はと見送」ってくれる。

これは出棺の際の儀礼である。「途中」は「みちなか」と訓むのがよい。野辺送りの時、人々が道に立ちならんで死者を見送るのである。

死者となった芭蕉は「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく」のである。この世（現世）はすでに「幻のちまた」である。さすがに、未練が残ると見えて「離別の泪をそゝく」ことになる。

行春ゆくや鳥啼魚なまぐらの目は泪なみだ

心なき鳥も魚も悲しそうに野辺送りをしてくれるのである。

芭蕉は少しあとのところで「只身すがらにと出立侍はべりを」とも述べている。

従来、「出立」は「いでたち」と訓まれ「出立する」「旅立つ」などの意に解されて来た。また「身支度をする」とする説もある。

しかし、これはどちらも間違いである。

「出立」は「でたち」と訓まれなければならない。デタチとは死出の旅に上ることを意味する言葉である。デタチはのちに神社仏閣への参詣の旅に出かけることをも意味するようになった。

つまり、神社仏閣へ出かけることは俗体を捨てて（死）聖体になることでもある。死者がつける白装束を行者が着けるのもそのためである。

『おくのほそ道』は、芭蕉が俗界を出て聖界・冥界におもむく旅、つまり冥界めぐりの旅であることを述べた文学であり、単なる紀行文学ではなく一種の宗教文学とも言うべきものだとするべきであろう。

#### (四)

『おくのほそ道』の出発について、もう一つ考えておかねばならぬ問題がある。

それは、出発の日がいつかという問題である。

さきにも触れたが曾良の『随行日記』は、

「巳三月廿日 日出、深川出船。巳ノ下尅千住ニ揚ル。

一、廿七日夜 カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余。」

という書き出しで始まっている。

『おくのほそ道』本文では、

「弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明ありありにて光おさまれる物から、不二の峯幽かすかにみえて、上野谷中うへのやなかの花の梢こずえ又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よひよりつどひて、舟ふねに乗のりて送る。千じゆと云所いよにて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸むねにふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく。」  
となっていて、三月二十七日、千住で船をあがったということになる。

『随行日記』に出てくる三月廿日、深川出船、廿七日、カスカベ宿泊、と、『おくのほそ道』に出てくる三月二十七日、千住上陸、とは、どういう関係になるのだろうか。

この問題についてはいろいろの説が出ているが人々を納得させるようなものはまだない。  
ところで『随行日記』の

「巳三月廿日 日出 深川出船。」

を角川文庫本『おくのほそ道』を除いて芭蕉全集（角川書店）も岩波文庫本『おくのほそ道』も「巳三月廿日 同出 深川出船」としている。「日出」が「同出」となっているのである。曾良自筆本を見ると、ここところが「日」とも「同」とも読める。筆で書いたもので、曖昧なのである。

『曾良奥の細道随行日記』がはじめて印刷刊行されたのは昭和十八年七月三十日であったが、それには「巳三月廿日 出 深川出船」とある。そうして上欄に「△脱字（七ノ字）ナラン」と書き入れがしてある。

その時からこのところは疑問になっていたらしい。しかし、実物（岩波文庫本には写真も出ている）を見ると明らかに「巳三月廿日日（同）出」と読める。

さて「巳三月廿日 日出」と「巳三月廿日 同出」と、どちらが正しいのであろうか。

「同出」と読んだ本が多い（芭蕉全集、岩波文庫等）のだが、「同出」とはどんな意味なのだろうか。まったく意味のない言葉である。したがって、これが間違いであることは明らかである。

そうだとすれば「日出」でなければならぬ筈である。

しからば「日出」とは何を意味するのだろうか。

「日出」を日の出の刻と解釈すれば夜明けの頃となる。陰暦三月二十七日は陽暦では五月十六日となる。その頃の日の出というと午前五時頃であらう。

「深川出船、巳ノ下刻 千住ニ揚ル」とある。「巳ノ下刻」は午前十一時半頃である。深川から千住まで隅田川を船でさかのぼるのに二時間もあれば十分であらう。日の出の頃、深川を出て千住に午前十一時半頃到着したとなれば時間的に合わなくなってくる。そうすれば日の出の刻に深川を出発したという解釈は成り立たなくなる。

したがって「日出」は日の出の刻という意味ではないということになる。

「日出」は、日の出を礼拝する「お日待ち祭」のことであらう。日の出を礼拝して恩徳を祈願する行事をさす。「日の出の行」とも言う。旧暦二十三日に行なうのが普通であるが、二十日が「ひのとみ たつ」で旅立ちの適日であるためこの日に「日の出の行」を行なったのであらう。旅立ちにあたって芭蕉は今度の旅をそれほど厳粛に考えたのであろう。

その行を終えたあと深川から船で千住におもむいたのではなからうか。

三月二十日朝、深川を出船して正午前に千住に到着した芭蕉が実際に千住の宿をあとにして奥州路へ向ったのは『おくのほそ道』によれば三月二十七日である。

『随行日記』を抄録した「人見本」および「小山田本」には「巳三月廿日、深川出船、千住上ル、廿六日迄逗留」とある。(古川清彦氏紹介、「連歌俳諧研究」)

『芭蕉桃青翁御正伝記』(天理図書館蔵)には「三月七日深川なる蝸牛の栖を出て、奥羽の行脚に首途し給。翁の年は四十六歳。三月廿日より廿六日迄、千住宿滞留、此処所々の吟会に招かる」とある。

これらはみな三月廿日から廿六日まで千住に滞在したとされているのである。これらの記事は決して無視されてはならない。

『随行日記』の「巳三月廿日 日出 深川出船。巳ノ下刻 千住ニ揚ル」と「廿七日夜 カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余。」との間、つまり二十日から二十七日までの空白について従来の芭蕉学者ははっきりした解決をつけていない。三月廿日は廿七日の書きあやまりであろうというようなことを言っている。

思うに、芭蕉は江戸出発前の七日間(二十日から二十七日まで)精進小屋(籠屋)にこもって前精進まえの行(精進潔斎)を行なったのではなからうか。七日という期間は修験道で山伏が精進潔斎に費やす日数とも一致している。

二十七日の朝、前夜から集っていた人々は舟に乗って送ってくれることになる。隅田川の右岸から左岸(千住の宿)まで舟で渡ったのであろう。

千住の宿からいよいよ旅の第一歩を踏み出すのである。

その時、芭蕉は死者となって(通過儀礼における擬死)旅立つ。野辺送り(出立でたち)の儀礼にしたがって「人々は途中なかに立たちならびて、後うしろかげのみゆる返はと見送」ってくれるのである。『おくのほそ道』には「只身みぢすがらにと出立でたちはべる侍を」とある。「出立」は「でたち」と訓む。野辺送り、葬式のことを意味することについてはさきにも述べておいた。葬式の儀礼が神社(伊勢神宮)参詣の意味となるとところに日本人の脱皮変身、死と再生の思想のあらわれがあるので



ある。

かくして、その日の夜は千住から九里ほどへだたった粕壁かすかべ（春日部）の宿にたどり着いて『おくのほそ道』の第一夜をあかすことになる。『随行日記』に「廿七日夜　カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余。」とあるのはその意味なのである。

注 『おくのほそ道』を死と再生という観点から論じた「死と再生」の文学——芭蕉『おくのほそ道』の秘密（読売新聞社、昭五四、三、二〇）という本をすでに刊行したのだが、紙数の関係で必ずしも詳しく論じられない点もあった。本稿は『おくのほそ道』の出発、についてだけ論じたものである。拙著とあわせてお読みいただければ幸いである。

なお、引用した『おくのほそ道』の本文は杉浦正一郎校註の岩波文庫本に拠った。その他は、おおむね日本古典文学大系本、『廻国雑記』は有朋堂文庫本に拠った。